

1

岩倉昌志は、新藤部長のお供でイスラエル大使館に出かけた。監視衛星の取引の件での打ち合わせだった。仕事の話が終わって、ビルの外まで担当のコーエンが見送りについてきた。

ちょうど大使館前の道路に、デモ隊が集まり、「ガザへの無差別攻撃をやめろ」「ジェノサイド反対」と書いたプラカードを掲げて、シュプレヒコールをしていた。日本の軍拡、戦争準備にも抗議していた。

イスラエルは、天井のない監獄と言われるガザに押し込めていたパレスチナ人の奇襲に激怒して、圧倒的な軍事力で無防備な人々を殺戮している。特に弱い子供や女性が犠牲になり、食料支援もストップして、ガザには飢餓が蔓延している。戦闘は一時的な停戦を繰り返しながら続いている。

デモ隊を見て、コーエンが顔をゆがめて舌打ちをした。

「安全保障があつてこそ、日常の生活が保障されることを理解していない人たちは困ったものだ」

相槌を打とうとした昌志は、そのデモ隊に紛れた若い女性の姿が気になって、もう一度確認しようと思返した時には、その姿は消えていた。あれは、娘の美咲によく似ていた。でも、他人の空気に違いない。美咲が、こんな活動をするはずがない。

昌志が勤める日本通信は、宇宙開発事業を世界相手に展開している。特に、地球観測衛星では、世界有数の技術力を持つっていると評価されていた。イスラエルの政府機関も関心を示して、視察団を送ってきたし、日本通信

からも現地に売り込みにも行った。コーエンは、実務窓口の担当者で、日本通信側のカウンセラーパーソンである昌志は、何度も顔を会わせて、ファーストネームで呼び合う仲である。

2

昌志は内心の動揺を抑えて、新藤と国府事業場に帰社した。この事業場は、河岸段丘の下に建っていて、段丘の上にある駅より低くなっている。以前は、事業場の外周に沿う道路を陸橋で渡ると、一旦地面に降りて、セキュリティゲートを通る必要があった。しかし、新しいビルの建設に合わせて、駅から道路の高さのまま事業場に入れるように陸橋を事業場内まで伸ばし、陸橋の途中でセキュリティチェックを済ませ、そのまま新ビルに入館できるようになった。

「すばらしい空中回廊だな」

新藤は、ご満悦だ。国の防衛予算がGDP二％に倍増する情勢のもと、会社は受注増に対応する体制を整えるため先行投資で新ビル建設に着手した。それに伴い、事業部の予算も増えていた。人員も増えて、みんな余裕をもって仕事できるようになった。部長が上機嫌だから昌志も、部下からプライベートで旅行に行く休暇申請があつても「いいよ。楽しんできなさい」と、気前よく承認している。リストラの時は、大変だった。休職している部下の家に行き、病でやつれた部下に今なら割増金ができるから早期退職に応じた方がいいと説得した時には、自分は人間の心を失って鬼になってしまったのだと思つた。

昌志は、レーダーの技術者だ。特に衛星に搭載する合成開口レーダー(SAR)の開発を担当してきた。一般的にレーダーは、マイクロ波もしくはミリ波と呼ばれる電磁波を対

象物に照射し、反射して返ってきた信号を分析して対象物を観測する。マイクロ波は可視光などに比べて波長が長いいため、雲などの影響を受けずに観測ができる。但し、分解能は波長に比例するため、マイクロ波をつかうレーダーはアンテナの直径を極めて大きくする必要があるので、物理的に限界がある。

これを解消するために開発されたのが合成開口レーダーだ。合成開口レーダーの概念は、軌道上に仮想のアンテナをいくつも並べたものである。軌道を移動中に送受信を繰り返し、受信した電波を、ドップラー効果を考慮に入れて合成し、仮想的に巨大なレーダーを実現している。

衛星SARは、太陽光を必要とせず、季節、昼夜、時間を問わず安定した観測が可能である。民間の利用としては、対象物のビフォア、アフター画像の比較によって、建物や道路の建設等による土地活用の変化などが把握可能となる。軍事に利用すれば、近隣国の核兵器実験の予兆をとらえる等、多方面での活用が可能である。

イスラエルとのプロジェクトでは、SARの性能を大幅に向上させて、高解像度を実現することを目標としている。

3

昼間の光景が気になって早めに帰宅した昌志は、自宅近くの公園で、美咲が外国人らしい男と話しているのを見かけた。男はがっしりした筋肉質の体で、濃いあごひげをはやしていた。男は引き留めようとする美咲を振り切って駅の方に向かって行った。美咲は、思いつめた顔をして男を見送っていた。

昌志は声をかけるか迷ったが、ただ事とは思えなかったので、思い切って美咲に声をかけた。

「彼は誰だい。外国の人みたいだけど」
「誰だっていいじゃない。ただの大学の友達よ」

「ふーん、でも、ずいぶん深刻な顔をしているね」
何気なく言った言葉だったが、美咲の琴線に触れたらしい。

「親戚の人が、ミサイル攻撃で亡くなったら誰だって深刻になるでしょう」

美咲は、溜まりにたまった憤懣をぶちまけるように叫んだ。やはり、美咲は昼間見たデモ隊にいたのだ。しかし、今は黙っていた方がいいと昌志は思った。

「なぜ、停戦させられないの。犠牲者の大部分は、女性や子供なのよ。イスラエルは、飛行機、戦車、重火器を使って無抵抗の市民を攻撃するなんて、おかしい」

正義感の強い美咲は、ガザでイスラエルの攻撃にさらされて多数の女性や子供が毎日死んでいるというニュースに怒りを露わにしていた。こうと思ったら、すぐに行動を起こして突き進んでいく美咲の性格をよく知っている昌志は、どう答えればいいか考えを巡らせていた。

「イスラエルに武器を売って儲けている人がいるのよ」

美咲が日本通信の事業を知った上で言っているのかどうか分からないが、昌志は自分が批判されているように感じて押し黙った。

家に帰ると、妻の裕子が迎えに出てきた。

「あら、二人いっしょなんて、どうしたの」
「いや、そこで、たまたまいっしょになっただけだ」

裕子は、「そうなの」とすぐに納得して、話題を変えた。

「さっき、長野のお義母さんから電話があった、お義父さん、膝がまた悪化してお勤めに苦労なさっているらしいわ」

昌志の実家は、古いお寺で、八十歳になる父の昌晃が住職をしている。今までは息子が

僧侶になって寺を継いできた。しかし、昌晃には三人も息子がいるのに誰も継がなかった。父も、自分のやりたいことをやればいいと強制することはなかった。でも、兄たちとは事情が違う自分が家を継ぐ義務があったのだという自責の念が、昌志の頭から離れたことはなかった。

4

新藤から呼び出しがあつて、昌志は部長の部屋に入った。新藤は宇宙探査のプロジェクトから昌志に技術応援の依頼が来ているんだと切り出した。

「まあ、純粹の科学研究は、予算も限られている。今後は、軍事転用可能なプロジェクトに予算が多く配分される。向こうでは苦勞のわりに得るものは少ないよ」

新藤も立場上形式的に伝えるが、本心ではないということをあからさまにして言った。

新藤に言われるまでもなく、これから大きな山場を迎えるアイン・プロジェクトに全精力を集中している昌志は他のことは眼中になかった。すぐに、自席に戻ろうとした昌志の背中に新藤の声が追いかけてきた。

「ところで、アイン・プロジェクトは、経済安情報保護法の対象になるので、我々はセキュリティ・クリアランスの対象になるそうだ。お互い身辺はきれいにしてあると思うが、今度は、家族も対象になるからな」

昌志の足が止まった。新藤が昌志に何か懸念をいだいているかと思つて振り返つたが、すでに新藤は忙しそうにパソコン画面に目を走らせていた。取り越し苦勞のようだった。

適性評価（セキュリティ・クリアランス）は、重要経済安情報に係る技術者・研究者について、政府機関が対象者とその家族、同居人について、犯罪及び懲戒の経歴、情報の

取扱いに係る違法行為、薬物の濫用及び影響、精神疾患、飲酒の節度、信用状態等経済的な状況について調査の上で判定を行い合格しなければ、該当する情報を扱うことができず、従つて対象業務を担当することができない。

当然、法律に記載されている項目について、調べられても、やましいところはないのだが、調査の過程では、さまざまなプライベートで機微にふれる情報が収集されるだろう。それらを握った政府機関が、どのように使うか昌志は、不安を拭い去ることはできなかった。

5

昌志は、父を見舞うために、GW休みを利用して家族といっしょに長野の実家に帰った。後部座席に座った美咲は顔色が悪く、しきりに外を見ていた。隣に座った妻の裕子が、どうしたのかと聞くと、

「友達のアフマドが家族のことが心配だから、今日帰国すると言っていたの。私は、今行つても何もできないのではないか。安全が確保されるまで待つべきじゃないかと言つたんだけど、彼は、エジプトからの入り口まででも行きたいと言つて……」

連日のようにガザの状況を、ニュースで聞かされているので、中東の地図が頭に浮かんだ。ガザ南部は、エジプトと境界を接している。だが境界の出入国管理は、イスラエルが行っているから、食料支援ですら厳しく制限されている。そんなところに近づくことは無謀というしかない。それでも、家族のことを思えば少しでも近くに行きたいと願うのは人情というものだろう。それにしても、国際ニュースで伝えられることが、我が家にとつて、こんな身近な問題になろうとは思ひもよらなかった。美咲の沈痛な表情から、アフマドとの関係は、もはや他人事と切り捨てられるよ

うなものでないことは明らかだった。むしろ、美咲がアフマドといっしょにエジプトに向かわなかっただけでも、胸をなでおろすべきことなのかもしれない。

高速道路を降りると、懐かしい故郷の景色が次々と目に飛び込んでくる。悠然と流れる大河、子供の頃よく友達と魚釣りに行って遊んだ。整然と区画された農地とは対照的に、古い町並みに入ると、狭い道路が曲がりくねって続く。ゆるい坂道の片側には、雑草が新緑に燃えていた。分かれ道にきて、石柱に挟まれた方の道を選ぶ。白い土塀に囲まれた寺院の境内に、ゆっくりと入っていく。

庫裡の戸を開けると、車の音を聞きつけたのか、母の淑子がにこやかな笑顔で迎えてくれた。

「遠いところ、よくおいでたね」

母の喜びようを見ると、車でくれば三時間もかからないのに、ずいぶん足が遠のいていることを申し訳なく思った。

おしゃべりを始めた女性たちを置いて、座敷に回ると父の昌晃が、背もたれのある籐の椅子に腰かけていた。

「どうなの。足の具合は」

「わざわざ、来てもらって悪いな。どうせ、淑子が大袈裟に言ったんだろう。読経の立居振舞いで、ちよつと痛みがあつてな」

我慢強い父が、痛みを認めるのだから、相当なのだろうと思った。

「それで、病院で診てもらったの」

「うーむ、今までだましましたよってきただ、手術をしないと直らないと言われた。ただ、変形性膝関節症の手術は、どれも一長一短があるようだ。本格的な手術をすると、リハビリを含めて半年はかかるというし、そうになると寺や檀家の法要に支障がでることになる」

父の苦悩は深そうだが、何も手助けしてあげることできない昌志は、話題を変えた。

「兄さんたちは、たまには帰ってくるの」

「二人ともしばらく帰ってきてきてないな。茂樹は、研究所に十年を超える雇用継続を求めて裁判をやると言っていた。賢治は、大病をして前の職場はやめざるを得なかったが、なんとか新しい仕事が見つかったらしい。二人とも自分のことで手一杯なんだろう」

父が知っている兄たちの情報は、昌志と大差なかった。兄たちに比べて、自分は平穏と言えるかもしれないが、親のことなのだから兄たちも忙しくても機会を作って帰ってくるべきじゃないかと思った。

「ところで、父さんが、熱心にやっていた例の活動は、続けているの」

昌志は、視線を昌晃から外して、庭に向けてながら聞いた。

「例の活動って、なんのことだ」

「ほら、憲法九条を守る活動とか、核兵器禁止の署名活動を一生懸命やっていたじゃない」

「もちろん、続けているさ。大事なことだ。やつと、おまえも関心を持つようになったのか」

昌晃は幾分、シニカルな笑いを浮かべながら言った。昌志が子供の頃から、昌晃は地域で平和の活動もしていた。昌志は、そんな父を尊敬していたが、高校生頃になると他のお寺の住職が、そんなことをしていないのに、なぜ父が、前に出てそういうことをするのだろうと疑問に思っていた。

社会の政治状況を把握できるようになり、日本通信に入社した後は、昌晃の活動のことは誰にも話さなくなった。父にとっては、大切なことなのだろうが、社会の本流を占める人々、特に大企業である日本通信の管理職にとっては、秘すべき事柄だと言うことは、入社以来の会社生活で、深く心に刻み付けてきたことだった。

黙り込んだ昌志の答えを待たず、昌晃が言った。

「明日は、九日だから、倉庫にあるハンドマイクや幟を、宣伝場所まで運ばないといけないな」

いんだ。車で運んでくれる親切な人はいないかなあ」

家中に聞こえるような声で言ったものだから、昌晃の声を聞きつけて、美咲がやってきた。

「私、車の免許取ったから運んであげる。お父さん、車使ってもいいでしょう」

ダメとも言えず、昌志は「運転、気を付けるんだぞ」と言うのが、精一杯だった。

6

孫に手伝ってもらった昌晃は上機嫌で、宣伝行動から帰ってきた。美咲も頬を上気させて言った。

「檀家の人に、和尚さんのお孫さんですか、寺を継いでいただけるんですかって聞かれちゃった」

「で、なんて答えたんだい」

昌志と裕子は驚いて聞いた。すると、昌晃が、美咲に代わって答えた。

「まだ、学生ですから、今いろいろ学んで自分の進路を考えているところですから、答えといたぞ」

「僧侶になる可能性を否定しなかったんですか」

昌志が非難の響きをこめて言うと、「可能性は、ゼロじゃないだろう」と昌晃は、平然と答えた。美咲本人は、父親と祖父の言い合いを尻目に「おなかすいちゃった」と奥に入っていた。

「そういえば、今日の宣伝に、見慣れない男が来て、しきりにカメラで写真を撮っていたな」

昌晃が、どっかと椅子に座りながら、つぶやいた。昌志は、なぜそんなことが気になるのだろうかと思った。

「とても目つきの鋭いやつだった」

尚も、昌晃は気がかりが晴れないようだった。

「きつと観光客だらぞ」

淑子が、夫の心配性を笑って終わりにしようと言った。

田舎で元気になって東京に戻り、朝元気に大学に通学した美咲だったが、昌志が帰宅した時には、家の中は沈痛な空気に満ちていた。「どうしたんだ。何があったんだ」

昌志が裕子に尋ねると、裕子が美咲の部屋を見上げながら言った。

「美咲の友達のアフマドさんが行方不明になったという連絡が大学にきていたそうなの。人道支援のトラックに紛れて、ガザに潜入して、そこでイスラエルの攻撃にあったということらしいの。涙にくれて帰ってきたから、どうしたのって聞いたたら、ようやく、それだけ話してくれたの」

「行方不明か。なら、生きている可能性もあるんだらぞ」

美咲は、翌朝になっても食卓に顔を見せなかった。昌志も、娘の悲しむ姿を思っ心が痛んだ。

7

翌月になって、昌晃が大学病院で手術を受けるために上京してきた。昌晃を迎えた夕食には、美咲も顔をだした。しかし、以前の弾けるような笑顔はなく、食事も無理して食べている風で、やつれた顔に目だけが異様に輝いていた。

美咲のことは、事前に昌晃にも伝えてあったので、昌晃も直接、そのことには触れず話し始めた。

「仏教は、不殺生戒、つまり殺してはならない、そのために寛容の精神が大事という教えだが、先の大戦では宗教団体も随分、戦争に

協力していたんだ。私の父親、つまり、美咲のひいおじいちゃんは、昌照という名前なんだが、日中戦争が始まった時、二十二歳だった。血気盛んで従軍僧になって大陸で布教活動を行った。教団は釣鐘などの金属を供出しただけでなく、信者からの寄付で作った戦闘機や戦艦まで軍に提供したんだ」

昌志も初めて聞く話で驚いた。美咲に至っては、目を大きく見開いて、驚愕していた。

「どうして、そんなこと……信じられない」「信じられないだろうが、事実なんだ。私も聞かされていなかったから、調べ始めて、びっくりした。軍や国に強制されて、逆らえず、しかたなく釣鐘なんかを供出したんだと思っていた。違った。みんな、遅れを取るまいと競ってやっていた。国民が、戦争に熱狂していたんだ。国民を扇動した責任は、教団、宗教にもある」

静寂が部屋を覆った。昌晃が苦渋の表情を浮かべながら言った。

「私は、その事実を知ってから、平和のために自分ができるところをするのが義務だと信じてやってきた」

「アフマドが、ユダヤ教では神はヤハウエと呼ばれ、イスラム教では神は、アッラーと呼ばれるが、呼び方が違うだけで同じ神だと教えてくれた。同じ神を信じる人たちが、なぜ殺し合いをしなければならないのだろうかと言っていた」

美咲がヤハウエという名前を言った時、昌志は息が詰まった。コーエンがプロジェクトの最初に説明してくれた「アインは、イスラエルの言葉で『目』という意味です。我々の神ヤハウエが、神の目で天空から我々をみまもってくれているのです」という言葉がよみがえった。

昌晃が、美咲の言葉に深くうなずきながら、聞いていた。それに力を得たのか美咲が続けて言った。

「アフマドが行方不明になってから、ずっと

考えてきた。私は何をすべきなのか。何をしたいのか。おじいちゃんの話聞いて、わかった気がした。私、おじいちゃんの活動を引き継ぎたい。今の大学をやめて、僧侶になって、お寺を継ぐ」

突然飛び出した美咲の宣言に昌志と裕子は腰を抜かした。

「美咲、大学を辞めるのは、もう少し考えてからの方がいいんじゃないか」

「せめて、大学は卒業して。お願い」
動揺する裕子をよそに、昌志は内心来るものが来たのかもしれないと考えていた。振り返ると、昌晃は慈愛に満ちた視線を美咲に送っていた。

8

手術を終えて、昌晃はリハビリもかねて一か月ほど入院することになった。休日に昌志が見舞いに行くと、父は喜んでくれた。昌晃は、四人部屋の窓際のベッドに寝ていた。

「私は、美咲が望むなら、美咲が僧侶になって寺を継ぐことに反対しません。もともと、私がやらなければならないことを、娘が代わってやってくれるということですから、私は、美咲に感謝しなければならぬのかもしれないかもしれません」

昌志は、ベッド脇の丸椅子に座って、窓の外に時折目をやりながら、話し始めた。

「大学を選ぶときに、茂樹兄さんから言われました。茂樹兄さんと賢治兄さんは、父さんの本当の子供じゃないって。おまえの名前は、昌が入っていて、俺達の名前にはないだろうって。だから、お寺はおまえが継がなきゃいけないんだって。でも、僕が好きなのは科学だった。父さんも自分の好きな道に進めばいいといってくれたから、兄さんから言われたことは誰にも話さなかった」

昌晃は、静かに笑みをたたえて昌志の話を聞いていた。

「いつか話さないといけないと思いつながら、きちんと向き合う機会がなかった。二人の母親は、檀家の娘だった。都会にでて結婚して子供ができたが、夫に先立たれた。夫には借金があつたらしい。生活に困つて故郷で死ぬと帰つてきたが、かわいい子供の顔を見て死にきれず、お寺の階段に座つていた。事情を聴いた。そのころ、私たち夫婦には子供がなかった。私は、あなたが迎えに来るまで子供たちを預かりましようと言つた。生活できるようになつたら、迎えに来てくださいと。五年経つた頃、彼女から手紙がきた。それに書かれていたのは、ようやく、借金を返してなんとか生活できるようになった。先日、お寺を訪ねて物陰から子供たちの様子を見た。子供たちも奥様によくつき、かわいがられていることがよくわかつた。五年も放つておいて、今更、母親ですと、どんな顔で会えるだろうか。引き取つて、また貧しい生活をさせるのもかわいそうだ。厚かましい願ひだが、これからもよろしくお願ひします。私は、死んだということにしておいてくださいと。私は、母親からあの子たちを奪つてしまつた。また、あの子たちから、母親を奪つてしまつた。罪深いことをした。

その後、お前が生まれた。お前を特別扱いするのが、兄たちを差別することになるのではと思つた。だから、子供たちにお寺を継げとは言えなかつた。

美咲が、自分からお寺を継ぐと言つてくれたのは本当にうれしかつた。まあ、どうなるのかわからんが」

二人で、窓の外に広がる東京郊外の景色を眺めた。

「おまえと、じっくり話ができるから、入院も悪くないな」

「兄さんたちにも見舞いに来るように僕から連絡しますよ。兄さんたちともじっくり話し

てください」

昌晃は、微笑みながら頷いていた。

9

昌志が部長の部屋に入つていくと、いつもご機嫌の部長が奥歯をかみしめ、難しい顔をしている。

「岩倉君、セキュリティ・クリアランスで不可の判定だ」

「えつ、誰のですか」

「君だよ。君の家族に不適切な外国人との交友関係があるとか、防衛費増額反対を宣伝している人がいるのかい。これでは、アイン・プロジェクトは無理だ」

昌志は、美咲を思い浮かべた。父の街頭宣伝も撮影されたのかもしれない。昌志は、神妙な顔をして「申し訳ありません」と部長に頭を下げて部屋を後にした。

空中回廊を歩きながら、昌志はビルを見上げた。昌志は、SARレーダーの進歩に全力を傾けてきた。まだまだ解決すべき課題があり、自分なりの解決案も胸に秘めている。そこから外れてしまうのは半身をもぎ取られるような気がする。なぜ、自分が外されるのか。

セキュリティ・クリアランスが問題としているのは、「犯罪及び懲戒の経歴、情報の取扱いに係る違法行為、薬物の濫用及び影響、精神疾患、飲酒の節度、信用状態等経済的な状況」ではないか。人種や思想は入っていないはずだ。それに、家族の交友関係や思想は、自分とは違う。別人格だ。

しかし、国や会社が要件に明記していないからと言って、思想を問題視しないことにはならない。過去の歴史を振り返れば、一番問題視してきたことは明らかだ。戦前の治安維持法においても軽微な犯罪履歴があつても、活用できる者は大目に見て、自分たちの用に

使ったが、思想犯だけは、絶対に許さなかった。今回の法律も要件に明文化していないが、具体的な運用は闇の中で、為政者のさじ加減でいかようにも解釈可能になっているのだから。

ただ、落胆もあつたが、一方で心にかかっていた靄が晴れた気もした。昌志はテクノロジーの進歩を追い求めてきた。しかし、自分が進歩させたテクノロジーが、人類の幸福ではなく、果てしない軍拡競争に使われているとしたら、それは自分が望んでいたことなのだろうかという疑問が次第に大きくなっていったのだ。そういう意味では、父と美咲の影響を、自分も受けていたということなのだろう。

今回自分の意志ではなかったが、軍事に使われる技術から強制的に排除されたのは、むしろ自分にとってはよかったのかもしれない。これ以上、傷口を深くしなくてよくなったのだから。

宇宙開発は、軍事ばかりではない。予算が少なくても人類に希望を与える宇宙探査のプロジェクトへの異動が、昌志にとって明るい道に思えてきた。

翌日、昌志は新藤のところに宇宙探査プロジェクトへ移りたいと相談に行った。新藤は口をへの字に曲げて聞き終わると、引き出しから一枚の紙を取り出した。

「もう少し、早かったら、君の願いはかなえられただろうが、残念だな。これが、君への正式な辞令だ」

新藤から手渡された異動辞令には、「品質管理部エキスパートへの異動を命じる」と書かれていた。技術とは何の関係もない事務部門への異動だった。昌志は脚の力が抜けて、崩れ落ちそうになるのを必死でこらえた。